

はじめに

『近代作家旧蔵書研究会 年報』第一号をお届けいたします。

近代作家旧蔵書研究会は、二〇二一年度の準備期間を経て、二〇二二年四月に、科学研究費助成事業（基盤研究 B 「近代作家旧蔵書群を対象とする調査・保護・データ化と横断的分析に関する総合的研究」）の補助を受け、飯島洋、小澤純、澤西祐典、多田蔵人、能地克宜、渡部麻実を中心にスタートしました。

日本中に、時に海も越えて埋蔵されている近代作家たちの旧蔵書群に対し、文学研究や図書館・文書館学の立場から意識的に光をあて、旧蔵書によって何ができるのかを問うと同時に、旧蔵書のために何ができるのかをも問いたいと考えています。複数の作家にまたがる共同研究は、旧蔵書研究としては新しい試みです。これにより、方法意識を自覚的に持ちつつ、旧蔵書を読むことの可能性に多様な観点から迫ることや、散在する蔵書群を見渡すことができる広い視界の獲得、資料の保存・活用をめぐるグローバルな視野の提供が目指せるはずです。

近代文学の資料には、活字化されたものと手書きのものが存在します。後者を代表するものとしては、創作ノート、草稿、日記、書簡が挙げられるでしょう。これらの多くは、それ以外に同じものが存在しない一点ものであり、通常、文化遺産としても文学資料としても、保護・保存に一定の配慮がなされています。他方、同じく手書き資料でありながら、右に挙げたものに比べ、保護と保存の対象、あるいは研究対象から漏れがちなものに、

書き込みを伴う旧蔵書があります。文学館等に寄贈される作家の遺品のなかで、しばしば最大量をほこる旧蔵書は、遺品としても比較的軽視されやすく、書き込みのないもの、蔵書印や献呈葉しか確認できないもの、あるいはそれさえもないものは、とくにその傾向が強く見受けられます。

明治一六〇年、昭和一〇〇年を迎える二〇二〇年代、震災や戦災を越えて今日に受け継がれた手書き資料、とりわけ重点的な保護・保存の対象外に置かれてきた旧蔵書の多くは、退色を伴う経年劣化による損傷・喪失の危機に瀕しています。文学資料であると同時に文化遺産でもある旧蔵書に対し、意識的にまなざしを向けることが、今、求められています。

(渡部麻実)